

『今物語』における「速さ」

——表現に着目して——

今 村 みゑ子

はじめに

説話集を一個の作品として解析する時、表現について探究することも一つの方法である。稿者は先に『今物語』について表現に着目して編纂の様相と意図を探究した⁽¹⁾。そこで得た結論は、本説話集は連歌を含めて多種多様な和歌、及び和歌周辺の表現を主眼とする説話を集め、配列した説話集であること、説話内部の表現は、一話中、あるいは隣り合い、連続し、また中を隔てた説話間で有機的に結びつき、多様な読みを開く機能を有していること、その機能には特に言語遊戯性が顕著で、主眼となる和歌の当意即妙な応酬や、遊戯性を本具する連歌、誹諧歌、狂歌、戯咲歌、隠題、興言利口などと密接に連動していることなどであった。

今回は「速さ」を示す表現に注目して『今物語』の作品としての特質をとらえたい。『今物語』には全体を通じて「速さ」の印象と呼べるようなものがあるように思う。それは、先に述べた、本説話集における当意即妙な応酬や遊戯性を本具する表現の背後に、それを生じる機転や判断力の速さがあることや、あるいはまた説話を文章化する際に言語遊戯を施した、編者自身の機知に富んだ言語感覚などに起因するものと思う。そのことと連動しているはずであ

るが、本作品中には「速さ」を端的に表す表現が多く見受けられる。よって本稿は、端的に「速さ」を表す表現に着目して、それらが本作品においてどのような意味を担うのかを考えてみることにする。

「速さ」を端的に表す表現として着目するのは、「心ばやさ」（三話）、「車を速く遣らせけるに」（「そのほどのはやさ」（共に二一話）など「はやさ」「速い」などの語、「とりあへず」（三話・五話・七話・一二話）、「とりもあへず」（二三話・一五話・五一話）、「ほど経べき事ならねば」（二〇話）、「ほどなく」（一九話・二七話・三五話）、「やがて」（七話・一〇話・一一話・一二話・一八話・二四話・二八話・三〇話・三二話・四〇話・四二話・四九話）といった即時性を表す表現、また「走り入りぬ」「走りつきて」（共に一〇話）、「走り出でにける」（一七話）、「はしりかへる」「走らせて」（共に二一話）、「走り向ひて」（二四話）、「自ら立ち走りて」（三〇話）、「人を走らせて」（四六話）、「走りおりて逃げ出でにければ」（五二話）、「走り逃げにけり」（五三話）など、「走る」のバリエーションなどである。これらは心と頭の働きの速さを示す「心ばやさ」から、「走る」という身体運動の速さまでを含むものである。

一 「心ばやさ」

まず「心ばやさ」に注目するが、本作品中には対義語に近い「心おくれ」があるので、それをも視野に入れる。

第三話は、ある殿上人が中門の板敷きに控えて寝殿にいる女房と応対していた。丁度雪が降って月がおぼろに見えていた折で、「このおぼろ月はいかがし候ふべき」と言うと、女房は返事はせずにと中からたたみを押し出してよこした。「とりあへずうちよりたたみを押し出しだしたりける心ばやさ、いみじかりけり」とある。

「心ばやさ」は、『日本国語大辞典』の「心はやさ」（清音か濁音かは判断し難い）の項に「心の動きの早いこと。頭の回転の早いこと、またその度合い」とある。

この女房は、殿上人の言葉が、『源氏物語』花宴などに引かれる大江千里歌に依ることから「おぼろ月夜にしく物

ぞなき」、すなわち、敷く物がないと訴えていると理解する。さらに、二人の状況が『二条太皇太后宮大式集』一四九番歌の詞書に「いみじうひえ侍ればと申せば、女房、しくものをたてまつらばやといらふるに」とある、俊頼と女房のやりとり似た状況であると理解し、俊頼に敷く物をやろうと言った女房の心遣いを想起し、返事ではなく、「とりあへず」、すなわち、さつと、「しく物」である「たたみ」を押し出す。三木紀人氏の「殿上人は、もとより花宴と源泉の大江千里の歌を意識しつつ、それとなく、往年の源俊頼のように底冷えが身にしみることを愁訴したのであつて、それに対する女房の対応の『とりあへず』には、相手のつらさへのいたわりが感じられてくる。彼女は氣の利いた一言を案ずるよりも、とにかく一刻もはやく敷物を供しようとしたのであろう」（講談社学術文庫『今物語』当該話解説）との解釈に従いたい。

「心ばやさ」に対する「いみじかりけり」、すなわち、大変な、素晴らしい、との評価は、女房の先蹤作品を想起する素養と理解の速さや状況に対する速い判断力と同時に、鋭敏に相手を思いやる心の働きをも指していると解される。

ここで、「心ばやさ」の用例を見ておこう。「心ばやさ」（「心はやさ」という熟した語の例は少ない。近い表現として「心のはやさ」「心はやし」などがあるが、それらを含めて用例は中古には見当たらず、管見の及ぶところ中世の『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』『太平記』などに散見する。

『十訓抄』には一例「心のはやさ」がある。その一―一八話は『今物語』第一〇話の同話であるが、『今物語』の方にはこの語はない。蔵人の速詠を、伊勢大輔の速詠を引き合いに出して、その「心のはやさにも、劣らずこそ聞こゆれ」と評価する。さらに「やさしき蔵人といはれけり」と、『今物語』第一〇話の「やさし蔵人と言はれける」との同様の記述をし、女房伊勢大輔や蔵人の頭の回転の速さを「心のはやさ」とし、それ故に「やさし」と評価する。『十訓抄』編者の見方をもつてすれば、『今物語』第一〇話の眼目は「心のはやさ」であり、同時に「心ばやさ」の語

をもつ『今物語』第三話にも「やさし」が備わっていることになる。

『古今著聞集』には五例ほど見出す。中で人との対応という点で『今物語』に近いのは「興言利口」編の三話である。五四二話では藤原孝道を、す速く状況を見て取ることから「心はやき物にて」と評するが、五五九話の孝道は、憎らしく思っていた僧が帰ったと思い、「よき程の物かな」と悪口を切り出し、まだ後ろに立っていたので、「此時とりもあへず」「たかくもなし。ひきくもなし。よき程の物な」と言い直した話で、「心はやき、いとをかしかりけり」と結ばれる。ここでは本話と同様に、「とりもあへず」と「心はやき」の語が共に用いられている。また、五六四話はその孝道の娘尾張内侍の話である。ある阿闍梨が「東方五百之塵」という句を「八十の塵」と間違えて詠じたところ、言い終わらないうちに「いま四百廿おち候ぬ」と言った。それを「心はやきの程ありがたき也」とする。これらは「興言利口」編に収められているごとく、口利きの速さが、頭の回転の速さであることをもって「心はやき」とするが、孝道は西流琵琶の家の当主、尾張も琵琶の名人である。他に「政道忠臣」編八三話は中御門右大臣宗忠が内裏焼失の折「心早く」宝物を確認した話。「偷盗」編四四一話は「心はやきもの」である偷盗大殿がす速く状況判断をした話。いずれも専門に長じた者に備わる独特の頭の回転の速さ、また判断力の速さを指すと言ってよいであろう。

『沙石集』（梵舜本）巻五は、なかなか付かなかった連歌の付け句を東入道が付けた時、初句を聞いただけで十念房が「アワ、ツキ候ヌルハ」とほめた。その即座に見通した頭の回転の速さを「心ハヤクコソ覚レ」と評する。また『太平記』巻十四「箱根竹下合戦事」では、幼いながら武士としての判断力にすぐれていたことをもって「心早キ人ニテ」とする。

これらの用例から「心ばやさ」もしくは「心のはやさ」「心はやし」は頭の回転のよさと機敏に状況判断する能力を指し、それらは多く職能や専門に長じた者に備わる素養や能力によると見られる。また、特に人の言動や状況に対応する速さに用いられるのが中世説話における特徴であるように思う。

『今物語』第三話もそうした特徴を備えている。しかし付け加えるなら、『今物語』の女房は単に機転が利くのみでなく、鋭敏に相手を思いやることにおいて、他の作品とは一線を画した人間性の温かさが付帯していることを特筆すべきであろう。

ところで、「心ばやさ」の対義語そのものではないが、近い表現と見られる「心おくれ」が第二四話にある。「心ばやさ」の厳密な対義語は「心おそさ」であり、意味は『日本国語大辞典』に「反応したり、理解したりする心のぶいこと」とある。一方、「心おくれ」は「①心がくじけてひるむこと。臆病。②心が劣ること。愚かなこと」とある。しかし「おくる」も「遅る、後る」の漢字に当たり、例えば『源氏物語』帚木に「その折につきなく、目にとまらぬなどを、推しはからず詠み出でたる、中なか心おくれで見ゆ」とあるなどは、状況を把握せず、気の利いたことのできない頭の回転の鈍さの意で、「心おそし」に近い意もあると言える。

さて、第二四話は、一夜の契りを結びながら忘れていた女の嘆きを知らされた天皇が、「まことにさる事あり。たづねざりける心おくれこそ」と言う。早速女を尋ねさせるが、女はすでに出家してしまっていた。それを知った天皇は「心おくれがとがになりつるよ」と言う。ここで「心おくれ」は「うかつ」（講談社学術文庫『今物語』当該話）ほどの訳でよいのであろうが、相手を忘れてしまうということは、相手の状況や気持ちを思いやることのできない、心の働きの鈍さ、想像力の欠如などを表すだろう。天皇の言葉に「心おくれ」が「とが」（罪）になったとあり、「心おくれ」は人の心をつなぐ付けることのない結果をもたらすものである。

なお、編者信実「きぬぎぬをしたひもゆかで哀わが心おくれの曉ぞ憂き」（『信実集』一一六）があり、この歌でも「心おくれ」が互いの心をつなぐ付けないことにおいて後悔されるものとなっている。

第三話の「心ばやさ」が豊かなコミュニケーションを成立させるのに対し、この「心おくれ」は互いの心の齟齬をもたらすというところに『今物語』における両語の対照性がある。

「とりあへず」と「とりもあへず」

先の第三話や『古今著聞集』五五九話にも見られたように、「心ばやさ」は、それ故に即座に行動をとるため「とりあへず」または「とりもあへず」という副詞と結びつく性質を有している。

さて、『今物語』にはす速い対応を示す「とりあへず」が四例（第三話、第五話、第七話、第一二話）、「とりもあへず」が三例（第一三話、第一五話、第五三話）ある。「作者好みの言葉か」（講談社学術文庫『今物語』第三話語釈）とも見られる。三木紀人氏は「知的反射神経の冴えに触れる『とりあへず……』という表現が繰り返し用いらているが、それもその（＊筆注、氏の言う「連歌の話題や才女が多出する『今物語』の一傾向」を指す）現れらしい」（同解説）と言及しており、注目される表現である。

これらは本来は複合動詞「とりあふ」（取ることができ）に打消が伴った語で、取ることができないほど速い、の意の連用形「とりあへず」、強調の助詞が入り「とりもあへず」となる。連用形であることから副詞として扱ってよい用法が生じたと見られる。「取るものもとりあへず」といった慣用句を除けば用例は多くはない。用法には中古・中世を通じて、急に、すぐに、何かが起こる、何かをする、の意味で、「高潮といふものになむ、取りあへず人損はるるとは聞けど」（『源氏物語』須磨）、「御兄たちはとりもあへずほろび給にし」（『大鏡』藤氏物語）、「返事ヲ何シカ待居タルニ、持来タレバ、不取敢ズ取テ披テ見レバ」（『今昔物語集』三一―八）、「女の物言ひかけたる返事に、とりあへずよきほどにする男はありがたき物ぞ」（『徒然草』一〇七段）、「我世つきぬる心ちして、とりあへず頭をろしぬ」（『増鏡』むら時雨）といった用法が見える。『今物語』の第七話の「……とて、とりあへず急ぎ出でんと」はこうした用法であろう。

ところが中世には、特に相手の言動に対して即座に反応・応酬する速さを示す場合に限定してよいような用法が見

られる。先の三木氏の言う「知的反射神経の冴えに触れる」とも言うべき用法である。『今物語』の用例のうち第三話、五話、一三話、一五話、五一話などはこの例で、『今物語』以外では『宇治拾遺物語』、『十訓抄』、『古今著聞集』、『沙石集』（慶長十年古活字本渡辺本）、『曾我物語』、『増鏡』などに見出される。

さて、『今物語』の第三話は前節で述べたが、「返事はなくて、とりあへずうちよりたたみを押し出したりける心ばやさ」とあるように、「とりあへず」は「心ばやさ」の現れとしての、教養や判断力に裏付けられたす速い反応であり、相手の立場を思いやる敏感な心遣いをも伴うものであった。

第五話は、高貴な女性を見ようと天皇が「にはかに押し入らせ給ひけり」という行為にでた時、傍らの人がとっさにとった行為である。「とりあへずとし火を人の消ちたりければ」とある。姿を見られてはいけないという女性のたしなみを守るべく、とっさに機転を利かしたわけで、この「とりあへず」にも、たしなみを心得た素養に基づく鋭敏な頭の回転と心遣いがある。その行為は結果として、天皇が櫛を火櫃の火にくべてその明かりで女性を見るといもう一つ機転の効いた行為（『源氏物語』蜩の巻などにのつとる）を導き、「御心の風情、けうありて、いとやさしかりけり」という風雅を構築することに寄与している。

第一二話は、女から難解な葦手書きの歌を送られた稚児が、「やがて」（すぐに）送られた葦手の上に機転の利いた返事の歌を書いたという話。編者は「とりあへず、いとあしからずや」との評語をものしているが、ここでの「とりあへず」は「とっさのことにしては」（講談社学術文庫『今物語』訳）ほどの意味で、稚児のす速い機転と反応を指しつつ、重層的には編者自身が「あし」を繰り返す言語遊戲に「とりあへず」（即座に）評語を加えるという、特異な意味をも担っていると思われる。その点、これは編者自身の感覚と地続きの表現であることが注目される。

第一三話は、桐火桶に積まれた銀を賜うといって頼長から、「桐火桶」と自分の名を隠題に歌を詠めといわれた頼政が、「とりもあへず、宇治川の瀬々の白波おちたぎりひをけさいかによりまさるらん」と詠み、「めでさせ給ひける

となん」という賞賛を得た話である。機転なくしてはできない隠題の歌を「とりもあへず」詠んだこと、しかもその歌は頼長への挨拶を込めて、頼長にちなむ「宇治川」とその情景を表す縁語などを駆使したものである。ここでも「とりもあへず」は頭の回転の速さを示すと同時に、詠歌能力と相手に対する配慮を伴っている。

第一五話は、待賢門院堀河と上西門院兵衛姉妹が連歌を付け合う話である。ともし火に油綿をさしたところ良い匂いがした。そこで堀河は「ともし火はたき物にこそ似たりけれ」と口にする。兵衛が「とりもあへず、丁子がしらの香やにほふらん」と付ける。「たき物」を受けつつ、油綿が髪に付ける油であるから丁子の「かしら」（頭）が匂う、と付けたのである。その見立ての面白さ、当意即妙性は、「いとおもしろかりけり」との評語で結ばれる。心を交わし合っている姉妹の日常において自然に営まれるこのようなやりとり、それは頭の回転の速さと連歌の能力、そして心の通い合いに由来する。「とりもあへず」はここでもそうした時間的速さのみではなく、互いの心の交流と深く関わる言葉である。

第五一話は、説経聴聞の場でたしなみある女房が大きなおならをしてしまい、皆が興ざめた瞬間、導師が「とりもあへず」説経文句に仕立ててその場を取り繕う話である。その説経は『法則集』などの言う「善根を讃える」といった法則に則ったものであるが、屁を徳と見立てた滑稽なもので、興言利口というべきである。そのす速い対応、職能に裏打ちされた文句、同時に、聴聞の場を繕うことが女性その人に向けられた聴衆の注意を反らすことでもあり、恥じ入っている女性を助けることにもなる。その導師の配慮も「とりもあへず」という言葉は担っているであろう。

これらの例のうち「とりもあへず」という強調の三例は、次に和歌・連歌・興言利口など言葉が発せられる時であり、『今物語』の編者が、特に言葉の発せられるす速さに強い関心を有していることを示すものと言えよう。

『今物語』の「とりあへず」「とりもあへず」は、相手にす速く、当意即妙に反応する機転や頭の回転を示すと同時に、その人に備わった能力・素養・心根と不可分のものであり、主としてそれにふさわしい立場のものによって担わ

れる表現と見られる。

先にあげた他の作品ではどうか。

『宇治拾遺物語』の七九話は、主が席をはずした隙に出された氷魚を多く食した僧の鼻から氷魚が飛び出た。主が「その御鼻より氷魚の出たるは、いかなる事にか」と言ったところ、「とりもあへず、この比の氷魚は目鼻より降り候なるぞ」と言い、「人みな、『は』とわらひけり」という話。一三〇話は、「鼻くら」とあだ名をもつ恵印が一本橋で「目くら」に出会い、「あな、あぶなのめくらや」と言ったところ、相手が「とりもあへず、あらい、鼻くらななり」と言ったので、「鼻くらにいひあはせたるが、おかしき事の一なりとか」と結ばれる話。

『十訓抄』三十八話は、みすぼらしい身なりの女房を見て男法師たちが、「花を見捨てて帰る猿丸」と連歌をしかけたところ、女房（実は俊成卿女）が「とりあへず、星まぼる犬の吠えるに驚きて」と付け、「人々恥ぢて、逃げにけり」となった話。一一三話は『今物語』第五話の同話で、天皇が「にはかにおし入らせおはしけるに」「とりもあへず（『今物語』では「とりあへず」、灯火を人の吹き消ちたりければ」とある。一〇一五六話は、ぬえを射た頼政に禄を渡しながら実定が「郭公雲居に名をもあぐるかな」と詠みかけると、頼政は「とりもあへず、弓張月のいるにまかせて」と付けた、「いみじかりけり」と結ばれる話。

『古今著聞集』文学・一三三話は、連句のたびに決まって「想像花陽洞」と言う人に、素俊法師が「とりもあへず、左存松子亭」と言つて、「満座興に入て腸をきりけるとぞ」とある。和歌・一五二話は、基俊が何となく童に「この堂は神か仏かおぼつかな」と口ずさみに言つたところ、童が「とりもあへず、ほうしみにぞとふべかりける」と付けて基俊をして「この童はただ物にあらず」と驚かせた話。偷盗・四四一話は、偷盗の大殿が太刀で切りつけたと見えたと一瞬、相手の法師は「とりもあへず、さいばうにてあはせて」と応じた場面。興言利口・五二二話は、俊成卿が何となく口ずさみに、「かぎあづかるもしやうの大事や」と言つたところ、そばにいたどうということもない女房が、

「とりもあへず、あけくれはさせることなきものゆへに」と大胆にも付けた話。興言利口・五五九話は前節既出、孝道が悪口を言おうとして、本人がいることを知り「とりもあへず」言い直した「心はやさ」を示す話。また興言利口・五七六話など。草木・六六六話は、初もみぢが消えたと言って人々が枝を見上げていると、藏人永継が、「とりもあへず、西の枝にこそ候けめ」と、古今和歌集の歌を踏まえて言ったので、実忠が「此比は、これほどの事も、心とくうちいづる人はかたきにであるに、優に候ものかな」と言つて満座感歎し、「まことに、とりもあへずいひいづるも、又ききとがむるも、いと優にぞ候ける」と結ばれる話。

『沙石集』（古活字本）巻七は、天文博士の妻に朝日の阿闍梨という僧が通っていたが、夫が急に帰ってきたので西の遣戸を開けて逃げたところ、「アヤシクモ西ニ朝日ノ出ルカナ」と詠みかけられ、「トリモアヘズ」「天文博士イカが見ル覧」と付けて罪を許された話。

『曾我物語』巻五「三原野の御狩の事」と巻八「三嶋にて笠懸いし事」は、景季が「とりもあへず」当意即妙の和歌を詠んで頼朝の意に叶い、領地を賜った話。巻九「祐経、屋形をかへし事」では、五郎が王藤内の果てた姿を見て、「一首とりあへずよみたりける」と誹諧歌を詠む。

『増鏡』「新島守」では、頼朝が「橋本の君にはなにを渡すべき」と詠んだところ、梶原平三景時が「とりもあへず、ただ杣山のくれであらばや」と付ける。

なお、『御伽草子』の「鉢かづき」「横笛草紙」「あきみち」に見える三例は和歌を「とりもあへず」詠んだものであるが、即座に詠んだというのみであつて、話自体が悲劇的であることもあり、相手の言動と絡み合う即妙性の要素はない。

以上、これらの多くは相手の言動に対する機転の利いた和歌、連歌、連句、興言利口などの応酬であり、相手から賞賛されたり、面白いという評価を与えられており、中世説話における言葉で応酬する時の機転・機知に対する関心

の高さを象徴する表現であると言つてよい。なお、こうした特質は世俗に属するものであるからであろう、仏教説話には「とりあへず」・「とりもあへず」は見られない。

『今物語』も多く相手の言動に対し即座に気の利いた応酬をする例であり、上記の作品に通じる世界を形成している。説話そのものの近似性でもある。また特に『古今著聞集』六六六話が今の世では珍しく「とりもあへず」「心とく」優雅なせりふをものしたことを「優なり」とすることと、『今物語』第三話の「とりあへず」たたみを押し出した「心ばやさ」を「やさし」とする評価は通じ合い、中世における王朝への憧憬という側面を垣間見ることができよう。『今物語』が小品であるにも関わらず全体で七例もこれらの語を有するのは際立ち、編者の目指す趣向や言語感覚に合う表現であると言えるであろう。

三 「ほどなく」

「ほど」は時間を表し、「ほどなし」は時間がいくらもたたない、まもない、即座に、の意となる。

第一九話は連歌を付けることをめぐり、「ほどなく」と「ほど経ければ」が対比的に用いられている。後白河院の日吉御幸の帰り、雨が降っていたので、ある上達部が「きのふ日よしと思ひしものを」という連歌を作った。付ける人がいないまま「ほど経ければ」（時間が経ったので）、院は一行のはるか前方にいた左馬権頭を召した。すると「ほどなく」（即座に）「けふはみな雨ふるさとへかへるかな」と付け、皆に賞賛された。

連歌において「ほどなく」ということは生命である。「ほど経て」はいけないのである。編者は二語を対比的に用いて「左馬権頭」、すなわち父隆信の晴れがましいエピソードを誇りをもって伝えようとした。連歌を「ほどなく」付けるには、特に連歌が座の中の文芸であるから、機を見るに敏にして、人々の気持ちなどを即座に把握して言葉にする能力が要請される。「ほどなく」はそうした機敏な反応・能力を表し、他ならぬ父その人の話であることにお

いて、この語が編者にとって重要な語であることをうかがわせる。

「ほど経」てはいけないのは連歌のみではない。第一〇話は「やさし蔵人」と賞賛されることになった蔵人の即詠の背景に「ほど経べき事ならねば」という状況への認識があったことを明らかにしている。

第一〇話は、「大納言なりける人」（実定）と小侍従の後朝の折の話である。暁に女の家から車を出そうとして大納言は「きと」（一瞬）振り返る。これは状況にふさわしい繊細な心情であろう。名残りを惜しむ風情で簾に透けて女の姿が見える。後朝の情緒を共有できる二人である。大納言は供の蔵人に、まだ見送っているのがふり捨てがたいから、何でもよい、言つて来なさいと命じる。蔵人は大変なことと思うが、後朝という、「ほど経べき事ならねば」という状況を認識して、「やがて」（すぐに）走って入り、言付かってきました、とまでは「さうなく」（さつと）言つたが、頭の中に歌はない、「をりしも」暁を告げる鶏の声、「きと」（とつさに）小侍従の名歌「あかぬ別れの」を思い出すと、それを踏まえて「物かはと君が言ひけん鳥の音の今朝しもなどかなしかるらん」と詠みかける。そしてまた「やがて」走って追いついて車の後ろに乗る。歌は大納言の意に叶い、感激した大納言は蔵人に領地まで授ける。この蔵人は「やさし蔵人」と言われたという。

暁の別れという状況と限定された短い時間において、こういうことは「ほど経べき事ならねば」、さつと行わなければいけない、という状況を蔵人は認識している。即詠とその前後の叙述は「やがて走り入りぬ」「さうなく言ひ出でたれど」「をりしも」「きと思ひ出でられければ」「やがて走りつきて」といった時間やす速い行動を示す語がふんだんに用いられて緊迫感に満ちている。蔵人は『尊卑分脈』などに「物加者蔵人」と称されているが、本話では編者は「やさし蔵人」と称されたとしている。こうした、主人の要請に応えるべく、「ほど経べき事ならねば」という状況に即した振る舞いと、意を得た即詠のできる鋭敏な頭脳と精神、これこそが細やかな心遣いと風雅を兼ね備えた「やさし」であると、編者は言いたいのである。

付け加えれば、先に見たように『十訓抄』の同話が蔵人の即詠を「心のはやさ」と評しているように、「心はやさ」も蔵人の振る舞いと即詠にはあり、蔵人と第三話の女房に共通する心の働きを認めることができる。

第二七話には「ほどなく」が二回用いられている。貧しかった小大進は太秦に参詣して歌を詠んで柱に書き付け、「ほどなく」八幡別当光清と結婚して裕福になった。また、その後子どももでき、光清が芋蔓が這ってぬかがなっているのを見て「はふほどにいもがぬかごはなりにけり」と言うと、「ほどなく」「いまはもりもやとるべかるらんと付けた。「おもしろかりけり」と評される。

前者の「ほどなく」は小大進の歌に仏が感応し、靈験がたちどころに現れたという速さを示す。後の「ほどなく」は連歌を即座に付けたことで、一九話の連歌の「ほどなく」、第一五話の姉妹の連歌の「とりもあへず」付けると同じ意味をもつ。打てば響く付け合いは才能のみでなく、夫婦の心の交流をも意味しており、第一五話の姉妹におけると同様の状況を示している。

第三五話は蓮花王という童が死んで舍利になり、その舍利を帳で覆っておいたところ、「この帳をほどなく虫の喰ひたりけるを見れば、……と喰ひて、はての文字の所に、虫の死にてありける、いとふしぎに、めでたき事なり」とある。四句偈の出現が舍利からのものであることを「ほどなく」が保証するのであり、第二七話前半の靈験のす速さと同種である。また、言葉が発せられる速さという点において、今まで見てきた傾向に通じる。

以上、「ほどなく」も主として言葉が発せられたり、反応が発現する時間の速さを表し、それがその場にふさわしいコミュニケーションを成立させて、「やさし」「おもしろし」「ふしぎにめでたし」といった価値観に相当する状況を出現させるものとなっている。

四 「やがて」

「やがて」が時間を示す場合、時間を経過することなく、次の事態・状態が出現するさまを表し、すぐさま、ただちに、といった意味になる。『今物語』に「やがて」は多出し十二例ある。

第七話は、男が急いで出ていこうとする様子を見て、「やがて、いとうらめしげなるに、をりふし、雨のはらはらと降りたりければ」、「降れや雨……」と歌を詠む。「やがて」は女房の瞬間的反應であり、「をりふし」の雨をとらえた即詠が詠まれる状況を指す。

第一〇話は前節で見た。「ほどふべきことならねば」という状況のもと、「やがて走り入りぬ」「やがて走りつきて」とあり、後に見る「走る」とも連係して、す速い行動を意味し、この二語の間に即詠がなされたことを際立たせる表現となっている。

第一一話は、長政の歌に感激して大臣が領地を「やがてたまはせたりけり」となった。これは歌のできばえが人を感動させたためにす速い反應が取られたのである。

第一二話も先に見たが、理解できない葦手にいかに返歌するかという緊迫した状況下、児は「うち案ずるけしき」であつたが、「やがてその葦手の上に」なかなかのできばえの歌をす速くものした。

第一八話は、伏見中納言の留守に訪れた西行を、侍が「かまちを張りて」追い返した話。侍から事情を聞いた中納言は「西行にこそありつらめ」と「心うがられ」（情けながつて）、その処置として侍を「やがて」追い出した。

第二四話も先に見た。一夜の契りを交わしただけで女を忘れてしまっていた天皇の、「たづねざりける心おくれこそ」との意向を受けて、使いは「やがて走り向ひてたづぬるに」とただちに女を探しに行く。ところがもうそこにはいない。天王寺へ行つたと聞き、「やがてそれより天王寺へ参り、寺々をたづぬるに」と再びただちに天王寺に行く。

女はすでに尼になってしまっており、報告された天皇は「心おくれがとがになりつる」と言う。ここで使いの行動のす速さを示す「やがて」の繰り返しは、天皇の「心おくれ」を償う行為としての意味を担っていると見えよう。

第二八話は、ある女房が賀茂の糺宮に七日間籠もって退出の折、歌を詠んで物に書き付け、「やがて」りっぱな人に愛されて幸運な人と言われる。ここでの「やがて」は第二七話の小大進の歌に仏が「ほどなく」感応したのと同じく、短期間を意味することで、歌に神が強く感応したことを表す。

第三〇話の前半は、病の床にあつていよいよ最期という海恵が「にはかに起きて」「自ら立ち走りて」「立文をとって」「広げて見て」「しばしうち案じて、返事書きてさし置きて」「又やがて寝入りにけり」という行動をとる。急に身を起こしてから、再び寝入ってしまうまでの一連の行動は「にはかに」「走る」「やがて」などの語を用いてスピーディーに表現され、この間に、海恵は夢の中で山王から歌を賜り、返歌をしたためた。歌は神の意に叶い、靈驗あつて病から回復する。

第三二話は、八幡の若宮の祟りで目がつぶれてしまった娘を、袈裟御子が若宮の前でかき抱いて、神歌を何度も謡う、すると「やがて御前にて、病やみ、目もさはさはとあきにけり」という靈驗が起る。「やがて」は神歌に対する神の感応と靈驗のす速さを指し、第二七話の「ほどなく」、第二八話の「やがて」と同類である。

第四〇話は、摂政殿から当世の歌詠みで誰が優れているのかと聞かれた家隆が、定家の歌を書いた畳紙を落として「やがて出でにけり」という行動で答える。この「やがて」出て行つた、というす速い行動は、返事の代わりになした機転を意味しているだろう。

第四二話は、『千載集』が撰集されると聞いて都に上つて来た西行が、自賛歌の「鳴たつ沢」の歌が入っていないと知り、「やがて」（そのままそこからただちに）引き返した話。「やがて」は西行の自意識の強い、性急な反応を指す。

第四九話は、実賢が法眼の位を望んで気の利いた歌を詠み、「やがてなされにけり」と、その歌がすぐに効果をもたらしたことを指す。

以上を整理すると、「やがて」は①七話、一〇話、一二話、三〇話など、歌が即座に、もしくは短時間内に詠まれた状況を示し、それ故相手や周囲の感動を呼ぶもの、②一一話、二八話、三三話、四九話など、詠まれた歌が相手の琴線に触れて、即座に良い反応・結果をもたらすもの、③四〇話、四二話など、発せられた言葉の内容に対して、即座にとられた行為を示すもの、④一八話、二四話など、相手を傷つけたことに対し、即座にとられた償いの行為を示すもの、ということになろうか。多くが言葉の発せられる、もしくは言葉によって引き起こされる、す速い反応を示しており、総じて「やがて」というす速さが人と人（あるいは人と神）とのコミュニケーションにおいて、重要な役割を担っていることを示していると言える。

五 「走る」

最初に挙げたように、「走る」の語のバリエーションは多い。稲田利徳氏に「人が走るとき」という論があるが、⁽⁴⁾本作品において多出する「走る」はどのような意味を担っているのであろうか。

第二一話は中でも「走る」ことが一話の生命線ともなっていると思われる。「京極太政大臣と聞こえける人、いまだ位浅かりけるほどに、雲居寺のほどを過ぎられけるに、瞻西上人の家を葺きけるをみて、『聖の屋をば目隠しに葺け』と言はせて、車を速く遣らせけるに、雑色のはしりかへる後ろに、小法師を走らせて、『あめの下にもりてきこゆることもあり』と言はせたりける、そのほどのはやさ、けしからざりけり。」とあり、一説話が一文で成っているのは、その内容のす速さと連関している。

京極太政大臣は藤原宗輔であるが、まだ位が低い時という設定により、身分の軽さと若さ故の口の軽さや機動力に

満ちている。瞻西上人に雑色を使いとしてからかいの連歌を詠みかける。聖瞻西上人は実は女犯の墮落聖、という過激な意味で、宗輔は車のスピードを上げて逃げる（実は宗輔自身の足も速かったことが『今鏡』藤波の下にあり、それも想起されるはずである）。その車に走り帰る雑色の足も速いにちがいない。さらにその後を、瞻西上人は小法師を走らせて追わせ、弁明の付け句を言わせる。瞻西上人の付け句と小法師の足の速さは、猛スピードで逃げる宗輔の車よりも速かったわけである。

連歌のす速い応酬、それはこれまでも見たとおり、連歌の生命であり、「とりもあへず」付ける、「ほどなく」付ける、という速さを示す語によって叙述されていた。ここではその速さを「走る」という身体の運動と連関させて叙述し、最もスピード感に富む連歌の応酬に仕立てている。からかう側と弁明する側が一文のうちにこちらへあちらへと走るスピード感は同時に、軽快かつ楽しさを感じさせるもので、少々過激なからかいと相俟って、打てば響く付け合いが宗輔と瞻西上人の親密さをも示しているであろう。

この「走る」ことによるスピーディーな連歌の応酬という話題は編者にとって好みの、自身の感覚に合うものだったに違いない。なぜなら、「車を速く遣らせけるに、雑色のはしりかへる後ろに、小法師を走らせて」と一気に叙述するのは、「速く遣る」や「走る」の繰り返しによってスピード感を出した言語遊戯であり、さらに一文のうち「そのほどのはやさ、けしからざりけり」（その時の速さは大変なものであった）との評語を連続させて、編者自身までが「はやさ」を繰り返す言語遊戯に参加しているのである。このことは、この話が編者の感覚と地続きのものであることの証と見られる。

実際、編者信実には「走る」を用いた俳諧歌がある。稲田氏が指摘するとおり、和歌では「人が走る」表現はほとんどなく、『古今著聞集』二四六話の澄憲の俳諧歌「ぬす人は長ばかまをやきたるらんそばを取りてぞはしりさりぬる」ぐらいである。ところが、信実には雨を擬人化して走らせた俳諧歌「雨のあしとまりもあへず此里にはしり過ぎ

ぬる夕立の雲」(『建長八年百首和歌』一一五九)がある。判者の真観は俳諧歌は歌合では勝としないという先例を指摘しつつも敢えてこれを「勝」とし、「まことにをかしく頤をとき睡をさますなかだてなるをや」と面白さを買っている。『今物語』の本話はそうした信実の感覚をよく伝えているものと思われる。

次に第一〇話である。これは先に「ほどふべきことならねば」や「やがて」という時間認識、時間表現として確認した話である。ここには「走る」も加わっている。歌を詠んでくるように言われた蔵人は、「ほど経べき事ならねば、やがて走り入りぬ」、そして歌を詠み、「やがて走りつきて、車の尻に乗りぬ」とある。二つの「走る」という語が、この間のわずかな時間と緊迫感を際立たせている。重責を見事に果たした即詠は、速くなければいけないという認識、和歌の素養、機転そして「走る」という速い行動とによっている。

次に五二話を見る。りっぱな尊い説経をしようとい意気込んでいるのであるから、この説経師は有能な説経師である。なればこそ、節経中に高座で「はこ」をしようという窮地に陥った時、「昨日ははこにすかされて屁をつかまつる。今日は屁にすかされてはこをつかまつる」との説経調の対句に仕立てた言い訳が可能だった。一瞬聴聞者には説経の一節と思われたに違いない。

『沙石集』巻六にはさまざまな説経師が登場し、多くは聞き苦しい説経、中には人に書いてもらって説経しているので紙を失った折には一言も言えなかった話などが載る。その場にふさわしい適切な説経をすることは能力と研鑽を要することなのである。その中で第七話は本話の類話であるが、編者無住は「名句ハイミジケレドモ、不覚バシキワメテケリ」と述べ、これを名句とする。

名句ではあるが説経ではない。いわゆる言葉巧みな興言利口である。続けて「と言ひて、走りおりて逃げ出でければ」と煙に巻いて逃げ出ていく行動が付随する。高座からまず走り降りるという動作、次に逃げて堂を出るという動作が一気に表現されて、やっかいな状況からの脱出を図る説経師の速い行動が巧みに描かれる。無論これは滑稽

譚であり、評語は「いとをかしかりけり」である。

この「逃げる」は『宇治拾遺物語』五話の興言利口譚の結末に似る。額の傷は随求陀羅尼をこめたものと偽って尊さを装った山伏が、実は女に通じてその夫に打ち割られた傷であることを露見され、なおも「その次にこめたるぞ」と平然と言つてのけ、「あつまれる人ども、一度に『は』と笑ひたるまぎれに、逃げていにけり」という話である。どちらも窮地に追い込まれながら、自身の言葉巧みな能力によつて人の反応を引き起こし、それを利用して脱出していく。おかしくもたくましい「中世的人間像」⁽⁵⁾と言えるものであろう。

説話集の最後第五三話も「走り逃げにけり」という結末である。目を病む僧が人の忠告どおり目を閉じて板風呂に入ったつもりが、脇戸の内であった。裸で「あな、ぬるの風呂や。焚け、焚け」と言つて座つていたが、人に笑われ、目を開けて事態を知り「走り逃げにけり」となった。「人々をかしく思ひあへりけり」と笑いの対象となる。

これは「をこ」な僧の滑稽譚と言うべきであるが、これも人の反応を逆手にとつて走り逃げる。こちらも『宇治拾遺物語』一一話に似る。一生不犯の僧が愚かにも「かはつるみ」を気にして笑われ、「大かた、どよみあへり。其紛に、はやう逃にけりとぞ」という結末である。

五二・五三話の「走り逃げ」は説話集全体の幕引きの役割を担つていられると思われるが、また、両者は稲田氏の「中世文学になると、『人が走る』場面は、王朝文学に比べてかなり多くなってくる。……滑稽な場面も、日常性を破るような、相当どぎつく、下卑た場面設定のなかで描写される傾向が強くなってくる」との見解に合致する例である。ただし、この種の話としては『今物語』にはそれほど「どぎつさ」や「下卑た」感じがないのは、編者のセンスが洗練されているためと思われる。

第一七話は、連歌の名人たちの連歌会をのぞいた法師が見事な付け句をし、「いとま申して」と「走り出でにける」とある。ここでは会心の名句をものして人々を驚かせた法師の得意と、それゆえの自己韜晦の意思を「走り出づ」に

託したものであろう。

第二四話は「心おくれ」を償う行為として「やがて走り向ひてたづぬるに」がある。

第三〇話は、病の床にあった海恵が「にはかに起きて」「自ら立ち走りて」という「あやし」い（奇妙な）行動として「走る」が用いられ、稲田氏が言う「狂人の走り」に近い意味と言えるが、ここでは夢の中で山王の歌にす速く返答しようと走ったのである。

第四六話は「人を走らせて」住の江殿を掃除させたが、結果、柱などに書かれていた歌を削り捨てるという事態を招く。これは走る行為が言葉を消滅させるという点で、第二一話、一〇話、三〇話などとは逆の皮肉な結果を生じている。

以上、「走る」は、特に第二一話、一〇話、五二話、一七話において連歌、和歌即詠、興言利口などを発する時の頭の回転の速さ、およびそれを支える知恵や素養と結びついて一対になっている。換言すれば頭の回転の速さを示す「心ばやさ」と「走る」運動とは一対になっているのである。なればこそ第二四話のように、「心おくれ」を償う行為として「走」らなければならなかった。あるいはまた、第五三話のように愚かさを補う行為として「走り逃げ」なければならなかった。

おわりに

心の働きとしての速さである「心ばやさ」、および身体の運動としての「走る」、また「とりあへず」「とりもあへず」「ほどなく」「やがて」といった即時性を表す時間語は、以上に見たごとく相互に連係している場合も多く、また互いに置換しうる場合も多い。これらは全編に渡り、かつ相互に想起される表現であるため、作品全体に「速さ」の印象を与えている。一話が短く全体も五三話という小さな説話集であるだけに「速さ」の印象は強く——それは無論

『今物語』の話の多くが表現の当意即妙性ということとも関わるのであるが——この説話集の特質となっていると言つてもよいだろう。

こうした「速さ」を表す表現は、主として言葉を発する者、もしくは行為する者の、頭の回転の速さ、それを支える素養、知性、能力、職能、心根などと深く関わって、豊かなコミュニケーションを成立させ、「やさし」「おもしろし」「をかし」といった価値観を伴い、編者信実の趣向や言語感覚が目指す世界を形成していると言えるだろう。それらはまた一面、『宇治拾遺物語』『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』などとも通じる中世的傾向を示しているが、人間味ある温かい交流において発現していることや、一定の品の良さ、知的センスを感じさせることに本作品のもつ特性を認めておきたい。

なお、当意即妙の応酬を表す「とり（も）あへず」は、『今物語』を含めて『宇治拾遺物語』『十訓抄』『古今著聞集』など、中世説話特有の趣向を形成していると見られるが、中で「やさし」「優なり」という評価を与えられているものは、中世人の、風雅な王朝への憧憬を垣間見ることのできるものである。

編者信実は歌人、連歌作者、そして似絵画家でもあった。歌人としては特に後年俳諧歌を多くものし、連歌を好んだことも相俟って、頭の回転の速さは編者の言語感覚を形成するものであっただろう。また、画家としては「隨身庭騎絵巻」の作者とも言われるが、身体の運動への眼差しが「走る」という語への独特な感覚となっているのであるまいか。

信実は同族である御子左家の当主定家・為家とは無論、反御子左家の旗頭であった真観とも、定家が疎んじた九条基家や橘長政とも親交を保っていた。⁽⁶⁾ そうした信実の人柄もこうした、明るく、知的で、心遣いあるす速い対応によりコミュニケーションを成立させる話と深く関わっているように思われるのである。

* 注

『今物語』の本文テキストは講談社学術文庫『今物語』（平成一〇）による。

（1）『今物語』の編纂と表現」『国語と国文学』九〇九号、平成一一・九

（2）「心はやさ」に近い語として「心疾し」があり、こちらは『源氏物語』葵、『今鏡』敷島の打聞、『古今著聞集』六六六話など中古・中世を通じて用いられている。

（3）『講談社学術文庫』当該話〈語釈〉の指摘による。

（4）『文学・語学』一二二号、平成一・八

（5）田口和夫「中世的人間像―宇治拾遺物語『狂惑の法師』の解釈から―」（『説話』昭和四三・六）が提唱する。

（6）久保田淳「藤原信実試論」（『和歌文学研究』五号、昭和三三・一）などが指摘する。